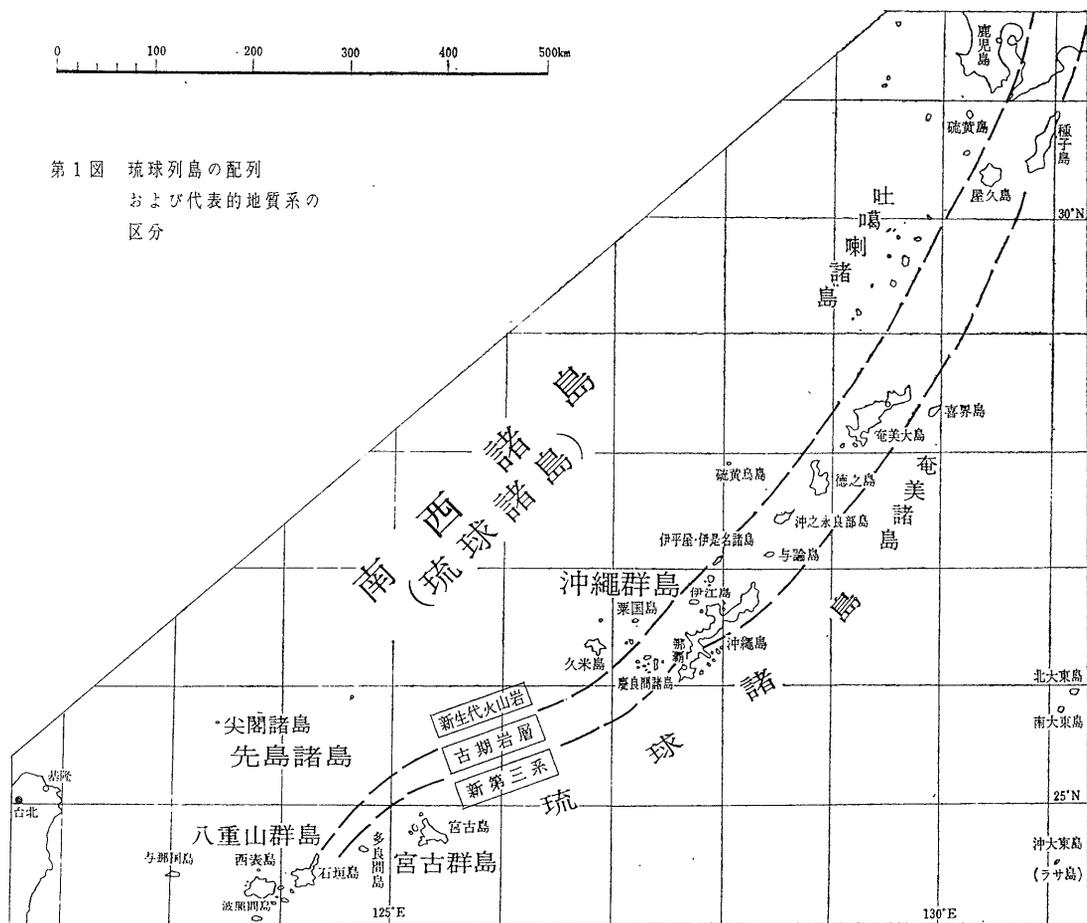




木野 義人

東に北大東島 西に与那国島 そして波照間島を南限とする琉球列島。 沖縄県として蘇った沖縄 宮古 八重山などの群島はその南半部を占める。 そこには千種を超える熱帯魚に彩られた透明な海が輝く。 島々をめぐる珊瑚礁は カロリン群島の環礁にもたとえられ 碎

ける連波は コバルトブルーやセイロンサファイアの浅海と黒潮外海との間に白一線を描く。 マングローブやシダ類 アダンやガジュマル。 島々に茂るそれらの亜熱帯林は 白砂と岩肌を包むあげず羽の美衣にも似て デイゴやハイビスカスの鮮かな紅色は 青と白と緑の空



第1図 琉球列島の配列
および代表的地質系の
区分

第1図 琉球列島の配列および代表的地質系の区分

間にみやらびの貫花を添える。

この花綵の島々はさまざまな歴史と文化を南から北へあるいは北から南へと伝え またそれ自身独自の文化を生んだ。それは熱帯・亜熱帯林から温暖帯照葉樹林へ生態気候区として世界唯一の連続帯を形成する一方 独自の海洋性多雨亜熱帯区を形成する琉球列島の側面でもある。そしてこの花綵列島に開花した文化の息吹きと生命の躍動の足下には 千古の歴史を伝えるフズリナやオパキュリナが地下深く秘められている。洋上に浮かび上った石灰岩や千枚岩や泥岩は それ自体西南日本累帯構造の一翼を形成するとともに 沖縄の生活や植生を支える基盤ともなっている。

1. マージとクチャの島尻地方

沖縄本島のいわゆる中・南部は古来中頭・島尻地方と呼ばれ沖縄の中央文化が栄えたところである。北部は国頭地方と呼ばれ またの名を山原とも称していた。

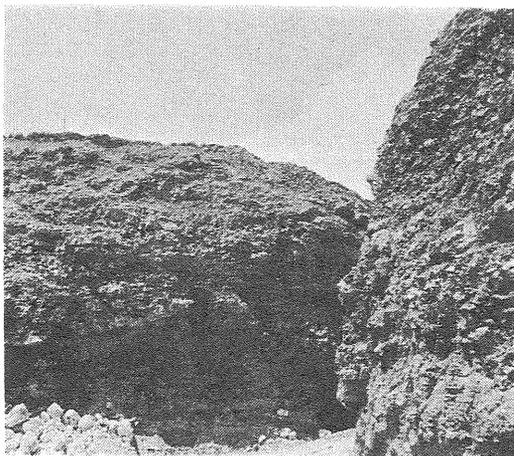
山原は本島が一番細くくびれた石川付近から北を指すがこれは地質的条件を中心とする自然的環境と大体一致している。国頭地方には中・古生層の古い岩盤が山岳地帯を作っているに対して 中頭・島尻地方には古い岩盤はほとんどなく 新第三紀以後の 砂岩を挟む泥岩層と新第三紀末から洪積世時代の珊瑚礁が隆起して出来た石灰岩が 丘陵や台地を作っている。新第三紀の砂岩を挟む泥岩層は島尻層群 石灰岩は琉球石灰岩と名付けられているが 泥岩地帯の表層土壌は 古来クチャと呼ばれ 石灰岩の風化土壌はマージと呼ばれている。このほか砂岩については ニービという言葉があるが 島尻地方の土地は大部分クチャとマージによって代表されるといってよいだろう。泥岩を主とする丘陵やその斜面のほか 沖積低地に相当するところはたいいくチャ地

帯で 石灰岩の台地と斜面はマージ地帯となっている。この地方には 沖積層や洪積層の厚い堆積盆地はなく 沖積低地でも数 10cm か数m下には 島尻層群か琉球石灰岩か隆起珊瑚礁が直ぐ現れる。

ところでクチャ地帯とマージ地帯とは この地方の土地条件をかなりはっきりと色分けすることになる。クチャ地帯は雨によって泥濘と化し 慢性的な流土状態によって丘陵は緩かな斜面となって 山脚と低平部との境がはっきりしないことが多い。さとうきびが繁る秋ともなると どこまでが斜面でどこから平坦地なのか区別がつかない。クチャ地帯の丘陵地では川幅はせいぜい 2～3mに過ぎないので その川さえも背丈 2～3mのきびに覆われてしまって 谷の中心を探すのは容易でない。クチャ地帯は 甘蔗の栽培に適しており さとうきび畑の最も発達しているのはこのクチャ地帯である。それは斜面にしる 平坦地にしる 地表の凹凸が少ないので耕作に便利であるという理由ばかりではない。泥濘地帯であるということは 水田地帯と同様の水理的条件を持っているということであり 雨による水流と流土によって絶えず新しい養分が補給される。土壌は水持ちが良いので干魃に強い。また土壌中に根が深く繁るので 強風で茎の部分が倒れても収穫時まで生育を続けることができると言った表層地質条件に負うところが大きい。きびはまた元来水を好む植物であるから一時的な冠水にもよく堪える。したがって低温地のような場所にも適している。毎年のように台風の強風と豪雨に襲われ また時には半年近くも雨らしい雨がなかった干魃にも堪えて 最悪の状態をまぬかれて何とか収穫できる理由はこの辺にある。クチャ地帯はさとうきびにとって天与の適地であり この地において甘蔗ほど



石灰岩台地の集落と広莫たるきび畑 摩文仁地区風景



琉球石灰岩の断面 具志頭村にて

それは地形的な側面もあるが、市街地を除いては河川沿いは自然の植生が維持されているか、あるいはきび畑になっていることが最大の理由のように思われる。台風直後の河川沿いには明らかに冠水した形跡が認められるが、クチャ地帯の谷が常に川に向かって緩かな自然斜面を維持し、このために巧みな自然排水が行なわれている。そして一時的な冠水は、全部自然植生やきび畑に吸収されている。昔ながらの村落は決して河川に接して立地することはない。かつては水田や湿原地帯であった東京都内の中小河川沿岸の沖積低地が、埋立てによる市街地化のために氾濫被害を生ずるようになったり、堤防が完備したために堤内地の内水氾濫が問題視されるようになった地方の例に比べて好対照を示している。自然は手を加えれば加える程、その歪の是正のための労力と資源が無限軌道の如くに止まることなく費される。沖繩の自然の妙なるシステムと祖先伝来の叡知に学ぶことは多い。自然環境と産業との調和の原点をさとうきび畑に見出すような気がする。

このような泥と低湿のクチャ地帯と対照的に、マーヅ地帯は常に高燥な高台にある。雨水は褐色のマーヅ土壌を経て石灰岩中に滲み込む。マーヅ地帯には地上を流れる川はない。マーヅ地帯にもきび畑は拓かれているが、その土地条件は収穫量に大きな影響を与えている。クチャ地帯での甘蔗の収穫量が1ヘクタール当り 150～180 トンといわれているのに対し、マーヅ地帯ではその約半分が標準である。最近では泥岩層を切取って、これを客土としてマーヅ土壌に混ぜている風景がよく見受けられる。一面に広がったきび畑を地質分類するときは、岩石の露頭がないから土壌で見分けるのであるが、マーヅ地帯で泥岩の客土が大規模に行なわれたところで

はよくだまされることがある。

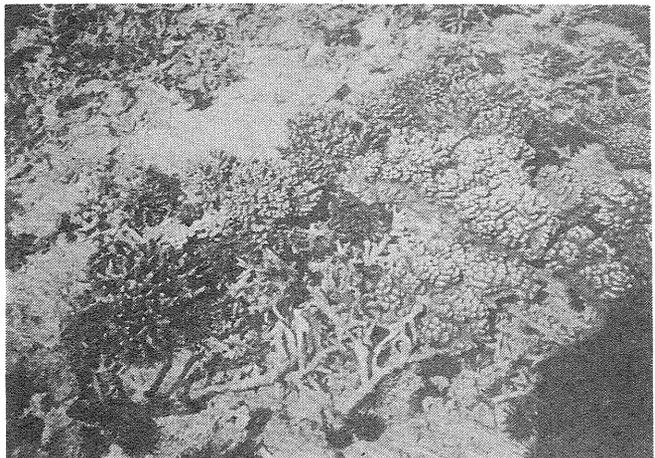
2. 石灰岩台地と生活

奄美群島から八重山群島までの島々には至るところ琉球石灰岩が発達している。島尻地方の約半分近くはこの石灰岩の台地である。島尻層群の泥岩地帯の丘陵となっているところでも、山の頂には石灰岩が載っていた形跡が見られるところから察すると、この地方のほとんど全域が琉球石灰岩に覆われた時代があったかも知れない。琉球石灰岩は元来島尻層群が海面上に姿を現わしはじめた頃、古期岩盤の島の周囲や島尻層群の上に繁殖した珊瑚や貝類や有孔虫などの石灰質動物の遺骸が堆積溶結し、それが陸上に隆起したもので、いわば一時代昔の隆起珊瑚礁に当る。現在の珊瑚礁海岸には、琉球石灰岩の中に含まれている動物群と同様な種類が見られる。海辺の砂や砂利は、実は珊瑚や貝や有孔虫の殻が大部分である。中には有孔虫だけからなる砂も珍しくない。有孔虫の白砂、垂直的な断崖、それらをとり巻くリーフの白波は、石灰岩地帯を特徴づける海岸風景である。

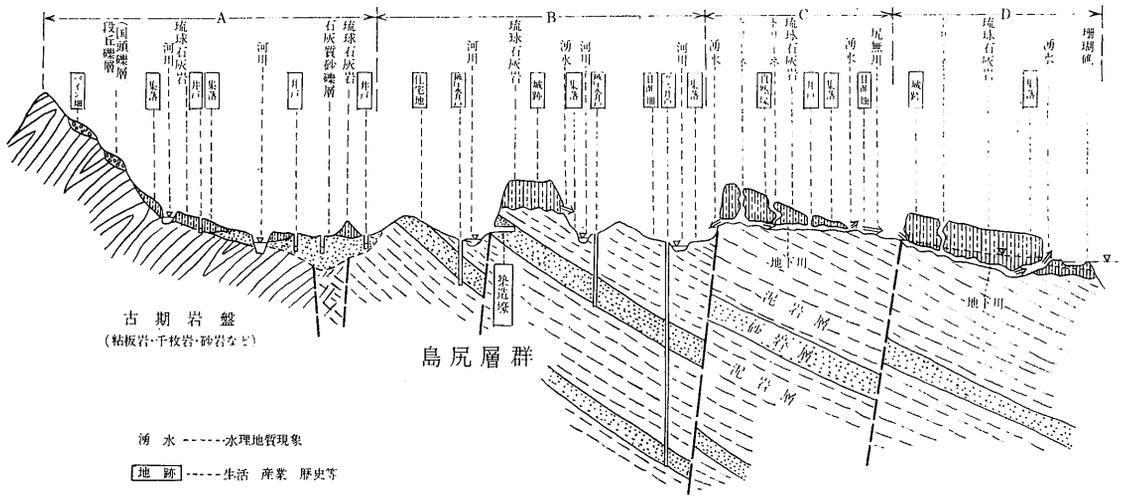
石灰岩台地の自然を語るとき、水を求めてやまなかった生活の歴史を忘れることはできない。マーヅから滲み込んだ雨水は石灰岩の地下深く潜り込み、下にある不透水性の受盤に達すると、その受盤の勾配に沿って地下水路を作りながら地下川として流れ去る。クチャ地帯や岩盤地帯では地上を流れる川が、マーヅ地帯では地下にあるわけである。しかし石灰岩中の地下水を探することは簡単ではない。とくに地下水が幅2～3mの限られた水路を流れている場合には不透水盤の谷をまず探して、その谷の中の地下川の部分に井戸を掘らなければならない。また地下川がどこかに湧き出ている、それが



石灰岩洞窟内の地下川 具志頭村新城付近



珊瑚礁浅瀬の中の現棲珊瑚群とウニ 玉城村奥武島にて

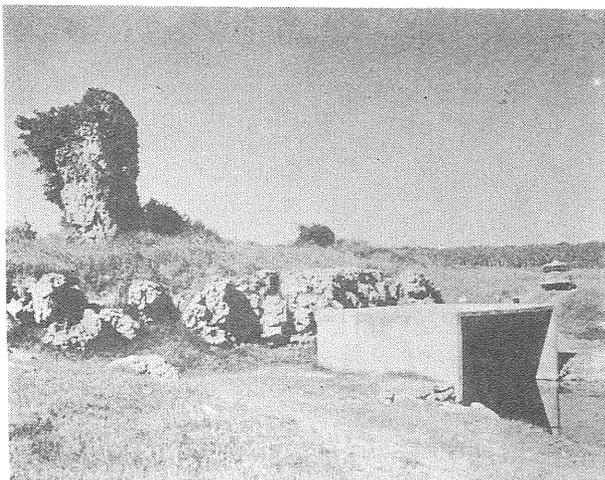


第4図 中頭・鳥尻地方における水理地質的条件と人間活動との関係

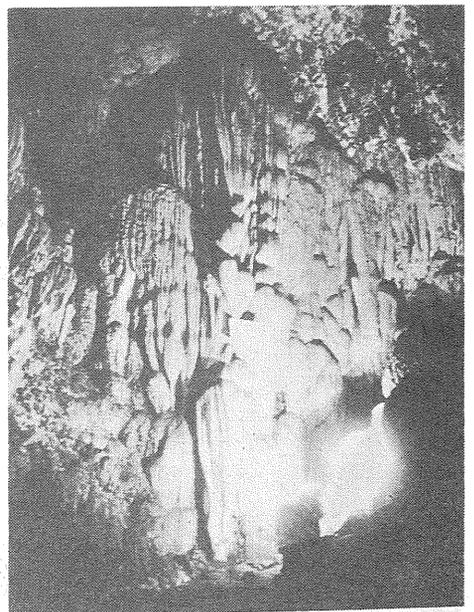
既に使用されている場合には それへの影響を考えなければならぬ。地下水が直接海へ逃げている場合には海水との関係に気を配る必要が起って来る。小さい離島で水に困るのは たいいてい地下水が塩水になっているためである。

石灰岩台地では 住民福祉を中心として 今後一層地下水の巧みな利用が重要となって来る。水を求めてやまない気持は昔も今も変わらない。ところで琉球石灰岩には 地下水の存在を掴むことが困難な場合と 比較的やさしい場合とがある。前者に当るものは糸満地域で 水理地質調査の結果を参考として掘られた調査井は 1969年から1971年までの3年間に10井余に達するが 十分な水量が得られたものは約5井 その確率は $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ と

いったところである。これに対して美里村から具志川市にかけての天願川沿岸地域では 1970年から1971年の2年間に掘られた調査井は約5井であるが 何れも地下水が得られ 試験水量は 日量 400~1,400 m^3 である。因みに 水の貴重な沖縄では 水に対する価値観が本州などの場合と全く異なっている。たとえば 那覇市のあたりでは 鳥尻層群の砂岩層の中の被圧地下水を汲み上げているが 日量 100~200 m^3 の地下水を得るのに深さ 100m 以上のさく井を行なっている。



琉球石灰岩台地の窟地(ウパーレ)における湧水 この湧水は川となって流れるが 約50mで再び石灰岩台地に吸込まれ 尻無川となっている 糸満市山城にて

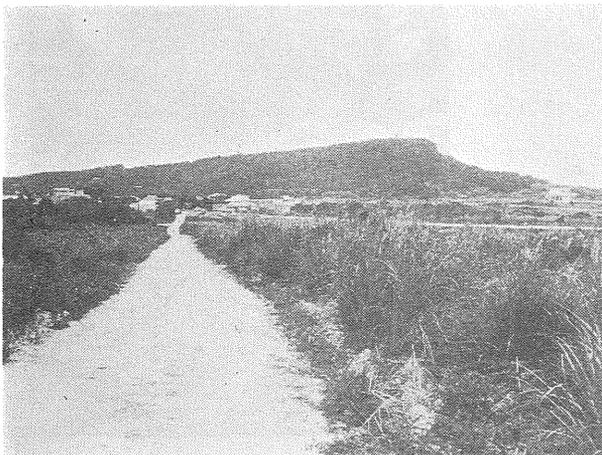


金武の鐘乳洞 現在この洞窟内には全く水が流れていない

石灰岩地域には湧水がきわめて多い。中頭・島尻地方で地元の人達に今日でもよく知られているものだけで170所を超える。第3図の地質図にその一部を示したが、何れも石灰岩台地の縁から湧き出している。かつては那覇市のあたりでも首里を中心として至る所に湧水があったと伝えられるが、市街地化に伴う水量の減少や水質の悪化、それに上水道の普及のため、今日利用されたりあるいは環境資源として残されているものはごくわずかとなっている。

湧水は地方名でガー ジャー ガマなどと呼ばれている。ガーは川で水の流れ、ジャーは水の落ちる状態を表わしているといわれる。またガマは釜で、ドリーネ状の水の吸込口が洞窟状になっていて、その中に水が湧き出しているところをいう。湧水は干越になってもめったに水が涸れない。石灰岩地域の人々は常に湧水と共に生きてきた。その集落の分布は湧水地点と切離すことはできない。今でも湧水を大切に保護され、水の出口には花や線香が供えられている。そこには自然へのおそれと崇拜の念を持って、自然と共に生活してきた祖先の生命が宿っている。

島尻地方には王朝時代の首里城をはじめとし、中城、伊波、座喜味、勝連、知花、浦添、南山、大里、玉城、知念、波名城、豊見城など、戦国時代群雄割拠の面影をしのばせる城址が多い。それらはすべて石灰岩の台地や石灰岩に囲まれた高地に位置している。城内や城外近くには湧水があり、あるいは城内に井戸を掘って石灰岩中の地下水を掘り所としていたことがうかがわれる。那覇市内には意外に坂が多い。全く平坦なところは那覇港と泊港の間に限られるといつてよい。とりわけ首里は、石畳の急坂が見どころの一つとさえなっているが、これも琉球石灰岩の残丘がしからしめるところである。



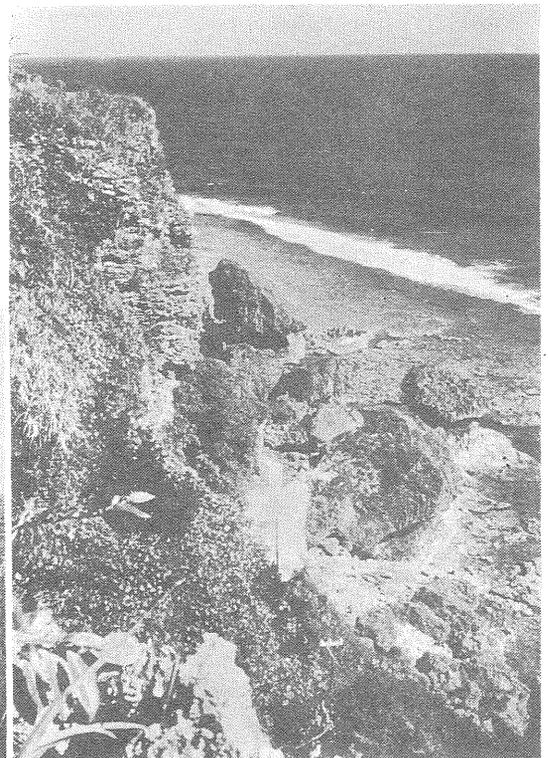
琉球石灰岩台地の南端近くから摩文仁丘を望む 付近のきび畑の間には白百合が咲き乱れていた

琉球石灰岩の中には洞窟が多い。鐘乳洞で有名なのは金武の洞窟であるが、糸満市域やその隣接地域にも多く、学術的な探検が行なわれている。

悲しい歴史ではあるが、沖縄戦において糸満地域が最後の拠点となったのも、ケスタ状の断崖や高地が多いという天然の要害に加えて、洞窟と湧水が豊富であったからに外ならない。糸満市域には約50ヵ所の湧水があり、その大部分は真壁、喜屋武、摩文仁などの地区に集中している。島尻地方の生活や歴史は、琉球石灰岩と島尻層群とが織りなす地形と、水理地質的背景を抜きにしては語るができない。第4図は島尻地方の水理地質的環境と人間活動との密接な関係を、A～Dのタイプを持つ地質断面を土台にして模式化したものである。たとえばAブロックは具志川市や嘉手納村の内陸部など、Bブロックは那覇周辺など比較的島尻層群が多いところ、Cブロックは糸満市真壁地区など、Dブロックは同摩文仁地区などによってそれぞれ代表される。島尻地方南端の断崖には海に注ぐ湧水が多いが、その源流は地形的稜線を越えて八重瀬岳方面から流れて来ている形跡がある。

3. 摩文仁の丘に立ちて

島尻地方の南端を跋涉するとき、戦いの深い傷跡に思



摩文仁付近の海崖 白日の太陽の下、珊瑚礁に砕け散る波が印象的であった

いを馳せないわけにはいかない。首里から南へ15kmクチャの泥濘の道は遠かった。摩文仁の空はあくまでも明るく まばゆいばかりの美しい海が広がる。白百合咲く丘に立てば 太平洋と東支那海の合する波音と珊瑚礁の鮮やかな色彩は 幾千年の昔から何事もなく続いて来たかに思われる。しかしあの時の悲しい光景は今眼前に蘇るのを覚える。それは人々の胸中から掻き消そうとしても消え去ることはないであろう。今こそ戦跡公園とはなっているが この地は飽くまでも幾十万の霊に捧げる墓標の地であり 祈りと静寂の聖地でなければならない。

壮大な夕焼がやってきた。海は風いで こまやかな波に西日がまばゆく反射した。

真一は 岩にもたれたまま華やかな夕景に眼を向けた。珊瑚礁が 美しい残照に映えて鮮やかな色彩をひろげている。数年前の夏 夕焼けた積乱雲の峰に没していった戦闘機の姿が思い起された。島が戦場化してから 自分の死を 落照の中に小さな点となって没してゆく機の孤影にみえてきた。祖国のみがすべてであり 自分の生命は そのために消滅して悔いはなかった。

しかし 眼の前にひろがる夕照は 頭の中にえがいてきた戦争の華麗さ 壮烈さの象徴とはちがっている。そこには悲愴な終末美でもいったものが感じられる。かれにとって祖国は 自分の足にふまえている郷土であり その土の上に住む非力な女や老人や子供たちの生命と云っていい。しかし郷土は 崖の素肌とわずかな海岸だけとなり老幼婦女子の多くは 死骸を白目のもとにさらしている。祖国は 深い傷を負って呻吟しているのだ。

夕焼の色彩が 真一の眼には この上なく悲しげな光に満ちたものに映った。しかし その中に自分の死を見出すことも生きてきた十五年間の時間の終末を飾る上で願ってもないことにも思っていた。

崖の所々で 爆発物の火がひらめいていた。しかし それも 茜色の光の中に透明な彩りをそえるだけで一層落日の印象を濃くしていた。

やがて夕闇が落ちてきて 月がのぼった。

真一は 夜空を見上げた。冴えた星の光が 空一面に散っている。散発的な銃声の音と 岩にくだけの波の音がしているだけで あたりはうつろな静寂がひろがっている。

女生徒たちは 雑糞の中から折り畳んだ制服をとり出して着換えていた。

やがて女生徒たちは 立ち上った。

「お世話になりました。ありがとうございました。」

彼女たちは 丁重に頭をさげると 小柄な女生徒の体をかかえるようにして崖下においていった。

岩のくぼみに残されたのは 真一と仲地と傷いた兵の三人だけだった。かれらは 身をかたくして黙っていた。

(吉村昭:「殉国」より)

4. 沖縄の植物と動物

デイゴは沖縄の県花である。乾燥によく堪える樹で 4月から5月にかけて真紅の花を開かせる。昔は那覇の崇元寺にデイゴの大木があったと聞く。インド洋沿岸から太平洋にかけて分布する熱帯～亜熱帯の花であり沖縄固有の名花でもある。沖縄の三大名花としてはデイゴのほかにはサンダンカとオオゴチョウが挙げられる。ブーゲンビリア ネム ユウナ それにテンサグの花。



農村の至るところにバナナやパイヤが実っている



至るところに咲いている仏桑華の花

夏を彩る沖縄の花は多い。

てんさぐの花や爪先に染みて
親のゆしぐとや肝に染みり

ぶっそうげ
仏桑華はいわゆるハイビスカスである。 夏に最も咲
き競うが 冬でも見ることができる。

琉球郵政庁が発行した各種切手の図案には 沖縄の動
植物や自然景観に関するものが多く その数は約60種類
に及ぶ。 それらを拾ってみると 次のようなものがある。

(動植物など)	(切手の名称)	(発行年)
甘 藷	甘藷伝来 350 年	1955
森 林	全琉緑化推進運動	1959
ヨナグニサン	日本生物教育大会	1959

名 護 湾	第 8 回九州対抗陸上競技	1960
大 さ ぎ	国勢調査	1960
琉 球 松	全琉緑化運動	1961
並 木 と 松	全琉緑化運動	1963
沖 繩 本 島 鳥 瞰 図	沖繩本島一周道路完成	1963
サ シ バ と 島	愛鳥週間	1963
塩 屋 湾 風 景	塩屋橋完成	1963
中 城 城 址	文化財保護週間	1963
パ イ ン と 甘 蔗 畑	第 2 回農業センサス	1964

セ マ ル ハ コ ガ メ	亀シリーズ	1965
タ イ マ イ	〃	1966
リ ュ ウ キ ュ ウ ヤ マ ガ メ	〃	1966

ノ グ チ ゲ ラ	天然記念物シリーズ	1966
ケ ラ マ ジ カ	〃	1966
ジ ュ ゴ ン	〃	1966

リ ュ ウ キ ュ ウ ツ バ メ	愛鳥週間	1966
ゆ り	慰霊の日	1966



琉 球 政 府 時 代 の 切 手

ハマクマノミ	熱帯魚シリーズ	1966
ハコフグ	〃	1967
フエヤツコ	〃	1967
モンガラカワハギ	〃	1967
セグロチョウチョウウオ	〃	1967
チヨウセンフデ	貝シリーズ	1967
ホネガイ	〃	1967
スイジガイ	〃	1968
ヤコウガイ	〃	1968
ベニソデガイ	〃	1968
赤瓦屋根	国際観光年	1967
ミナミコメツキガニ	かにシリーズ	1968
リュウキュウシオマネキ	〃	1969
ヤクジヤマガニ	〃	1969
ギダーサオカガニ	〃	1969
ツノメガニ	〃	1962
宇根の大そてつ	文化財保護週間	1970
沖縄戦跡政府立公園 (摩文仁丘)	琉球政府立公園シリーズ	1971
沖縄海岸政府立公園 (屋我地内海)	〃	1971
与勝海上政府立公園 (屋慶名港)	〃	1971
沖縄西表政府立公園 (カンピラー滝)	〃	不発行
海と島	海洋シリーズ	1972
さんご礁	〃	1972
海島と海と島	〃	1972
(以上記念・特殊切手)		
ぶっそうげ	動植物シリーズ	1959
ツノダシ	〃	1959
タイコ貝	〃	1959
コノハチヨウ	〃	1959
クラゲ	〃	1959
でいご	花シリーズ	1962
ゆうな	〃	1962
いじゆ	〃	1962
てんさぐ	〃	1962
さんにん	〃	1962
はまおもと	〃	1963
月下美人	〃	1963
おおごちょう	〃	1971
さんだんか	〃	1971
(以上通常切手)		

ウマツなどがよく知られている。島尻地方の原生樹林は戦火と都市化と各種施設の侵蝕によってほとんど消滅し、わずかに人工樹林としてのモクマオの並木が目につくに過ぎないが、国頭地方には未だ原生樹林や群落として残されており、昼なお暗いジャングルに踏み迷うこともある。

名護の街の真中に聳える「ヒンプンガジュマル」は高さ17m、周囲10.4m、樹令300年といわれる天然記念物である。名護の街路にはかつて両側にモクマオ、センダン、桜、桃、松などが植えられ、四季の変化を楽しませてくれたと聞く。名護城址の立つ千板岩の山には桜が1月に咲く。夏から秋にかけては蟬の音がしきり、11月になってもジーボン、ジーボンと鳴いている。温帯区にはカナカナと鳴くヒグラシ、暖帯にはジーシャワシャワと鳴くクマゼミ、そして亜熱帯の沖繩ではまた蟬の種類が違う面白さがある。

ヒルギはマングローブで琉球コウガイとも呼ばれている。海水と淡水とが混った河口の水中に自生し、水面上の幹や枝から多数の気根を垂れている。八重山では至るところに密林をなしているが、本島ではめったに見られなくなった。わずかに残された東村慶佐次川河口の群落は天然記念物に指定されている。このほか屋我地内海に注ぐ呉我川や湧川の河口にも小さい木が見られるが、廃水の影響によって絶滅に傾いている。

島尻地方で一見松林のように眺められるものは、たいていモクマオであるが、国頭地方には本当の松が多い。これはリュウキュウ松と呼ばれるもので、その北限は奄美諸島である。今帰仁村の松並木や瀬底島の古期石灰岩上に繁茂する松とソテツの林、それに上本部の琉球石灰岩の旧海蝕崖にみごとな群落を示すソテツの自生林は是非保存したいものである。

国頭地方には昔ながらの落着いたたたずまいを持った村落が多い。中頭地方を本州の太平洋ベルト地帯にたとえれば、国頭地方はさながら東北の農村地帯といった感じを起こさせる。バナナやパイナップルや赤い瓦屋根とともに、沖縄の村を象徴する風物詩であるが、とくに国頭地方に多く残されている。本部半島をはじめとして国頭地方には、沖縄としては珍しく、柑橘類が多いが、蜜柑といっても小さく酸味が強い。シークワーサーと呼ばれるものは特に酸味が強いが、重要なビタミンC補給源となっている。

パインは酸性土壌にのみ生育し、琉球石灰岩や島尻層群ばかりの中頭・島尻地方では、石川に近い部分を除いては栽培することができないが、国頭地方では石灰岩以

亜熱帯林を構成するものとして、ガジュマル、シダ類、ヒルギ、ソテツ、アダン、それにモクマオ、リュウキュウ

外の古期岩層の土壌では 雑草も育たないような開墾地に続々とパイン畑が広がっている。余りに山の斜面を開墾するので 原生林を失った裸の土壌は雨によって流され あるいは崩壊し 台風直後には 海が黄褐色に染ってしまう 開拓公害とも言えるような新しい現象を生じている。その代り 一般には石灰岩の上には決してパインを作ることがないから パイン畑を見て そこが石灰岩地帯でないことが一目で分かる。

備瀬のフクギ並木はみごとで 久米島仲里村のフクギ並木に匹敵する。フクギは防風 防火林として大切にされているが 自然と調和した産業的利用価値も大きい。フクギで思い出されるのは紅型工芸である。紅型は草木染で 藍や紅花など植物性の染料を使う。紅 藍 黄 の3色によって代表される原色的なその色彩は 澄みきったスカイブルーの下 白い石灰岩やブルーグリンの珊瑚礁に映えて鮮やかなコントラストを描き 亜熱帯樹林やデイゴやユウナの花に調和する。そこにはハワイのアロハのような軽々しさはなく 藍染めの落ち着きと 一筆一筆にこめられた繊細な芸術がある。フクギの幹は紅型の染料として用いられる。

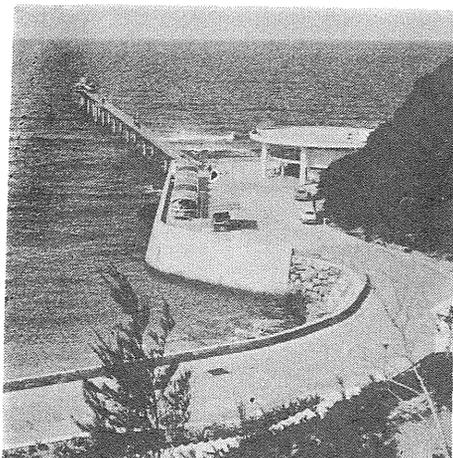
沖縄の植物の多くは海洋性多雨亜熱帯気候のもとに育まれているが それはまた石灰岩地帯特有の乾燥と険しい岩肌にも堪え得るものである。乾燥と露岩に特有の植物群の常として その成育は遅く 一度失われた原生林の回復には 100年単位の長い年月を要する。そしてこの原生林を唯一の棲みかとして生息している動物群がいる。原生林はまた 水源の涵養と流出量の調節 さらに表土の流出防止に大きな働きを持っていることも見逃すことはできない。ここに沖縄の生物に関する高校生の作文の一部を紹介する。

草むらの中から聞こえてくる小鳥の声に耳を奪われたり 植物に関する知識の有無にかかわらず山中にひっそりと咲く可憐な花を眺め 感動し 心の安らぎをおぼえたことは誰しも経験したことがあるでしょう。いつになっても自然は私達の心をつかむ力もち これは偉大な人類の科学力をもってしても作りえないものであると思います。

琉球列島は生物の分類上 旧北区と東洋区の境界線ふきんに位置し おもしろい動植物が数多く住んでいます。たとえば 去年動物学会をにぎわした イリオモテヤマネコ 一種で一属を構成する世界の珍鳥ノグチゲラ 世界最大の蛾といわれるヨナグニサン 翅が枯葉に似ているコノハ蝶 島々に隔離されて亜種化した多くの動物(ハコガメ ケラマンカ ヨナグニ馬)等の沖縄特産の種や珍しい種が多数生息しています。しかし これらの生物たちも人間が増え 動植物の生息地をまったく無計画に開拓したことにより山の奥深く または離れ島等でわずかにその命を守り続けているのです。このような生命の危機にさらされている生物たちが滅びる前になんらかの適当な保護策を考えねばなりません。

戦争によって広大な原野を焼き払い 生物たちから その生息地を無理にとりあげてしまった人類にとって いかにかそれらの保護をし いかにしてそれらを増やしていくかを考えることは当然の義務であると信じます。ところで現在はどうでしょうか まんぞくな取り締まりも行なわれておらず 工場からの排出物は遠慮なく川に放出され魚の住めなくなった所も多くなり 森林の木々は伐採され畑と化しつつあります。早急に保護策を考え 実施しないと化石となる生物たちがでてくるのです。しかし ただ単に生物を愛し可愛がるだけでその方法を考えないならばなんにもならないと思います。たとえば 寒いからといって 犬が着物をきせられたり 狭い飼育箱の中をヒーターで温められるよりも 野外のすみきった自然の中での生活がいいにきまっているからです。野性の性質を喪失させることなく彼らの生活を守ってやるのが一番いい方法だと思います。

(首里高校3年 新崎宏:「自然の保護」
……第8回「青少年科学の日」優秀賞受賞論文 1969 より)



部瀬名岬の海中展望塔



本部半島の農村風景 島尻地方と異なって周囲は濃い緑の森に包まれている。今帰仁村呉我山にて

5. 山岳と海岸美の国頭地方

台地と丘陵 クチヤとマージ そして原生林の失われた どちらかといえばドライな島尻地方に対して 国頭地方は山と川 岩石と海岸 そして原生林の残された自然環境の宝庫である。 落着いた町や山村のたたずまいは 那覇からやって来た人々にとって別天地のような安らぎを覚えさせるものがある。 騒々しい「西部の街」も 機械文明の粋をこらしたコンビナートもなく そこには平和と自然の中に生きる人間と生物のユートピアがある。 それは懐古と安息の山河を失った島尻の人々にとって こよなき憧れであり 心のふるさとでもある。

古生層や中生層を主体とする岩石は北に向かって次第に高い山岳地帯を残し 標高約500mの与那覇岳周辺に残された原生林は ノグチゲラをはじめとする生きものの最後に残された安住の地といわれる。 周囲に断崖が迫る細長い島にとって 標高400m以上の山々は 想像以上に峻しく感じられ 特に亜熱帯樹林に包まれたところは 容易に人を近づけない 深山幽谷を思わせる。 山岳地帯の中でも古期石灰岩や砂岩地帯は特に峻しく また石英斑岩などの岩脈が貫いているところでは珍しく滝を作っている。 名護近くの轟の滝はその例である。 古生層や中生層の古期石灰岩は 辺戸岬 塩屋湾北岸 本部半島などに広く分布し 石灰岩特有の地形を呈するとともに 大規模な湧水地帯を形成している。

国頭地方の海岸は未だ自然の様子が残されている。 砂浜と海崖とが繰返されながら変化に富んだ海岸線が 延々と続く有様は 三陸海岸 日南海岸とともに三大海岸と呼ぶことができよう。 国頭地区の西海岸は この5月15日を以て沖縄海岸国定公園となった。 同時に国定公園に編入されたものとしては 摩文仁海岸一帯の沖縄戦跡国定公園があり また八重山群島の西表島は西表

国立公園となった。 何れも政府立公園が受け継がれたものであるが ひとり勝連半島周辺の与勝海上公園のみが国の指定を受ける資格を失ったことは残念である。

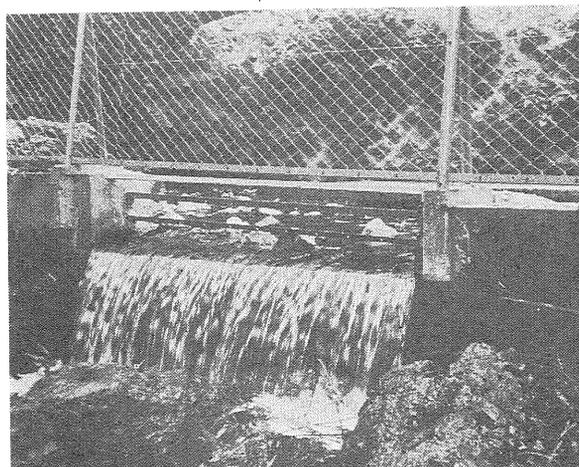
沖縄海岸国定公園は辺戸岬から残波岬にかけて 国頭村 大宜味村 名護市 今帰仁村および恩納村の各一部を含む西海岸一帯である。 与那覇岳および辺戸岬岳周辺が特別保護区 部瀬名岬付近が海中公園地区に指定されている。

従来の経験からすれば 秘境が世間に知れたときには既に秘境でなくなり 公園に指定されることは即俗化を促進することを意味していた。 現在既に西海岸の一部には俗化の傾向が見られ また観光開発の名のもとに私有権の乱用が目立ちはじめている。 過去の本土と同じ結果にならないことを祈りたい。

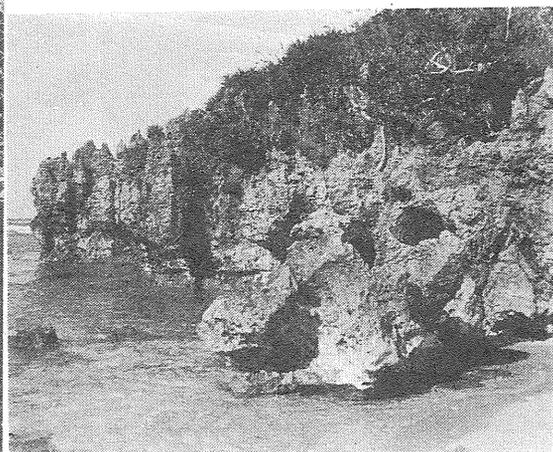
6. 岩と水の庭園 本部半島

本部半島は国頭地方の自然の縮図である。 とりわけ石灰岩の侵蝕形によってできた岩山と 石灰岩に由来する水の豊富なことは沖縄島随一といえる。 第5図に石灰岩の分布を中心とする 本部半島の地質図を 第6図にその代表的な断面をそれぞれ示した。

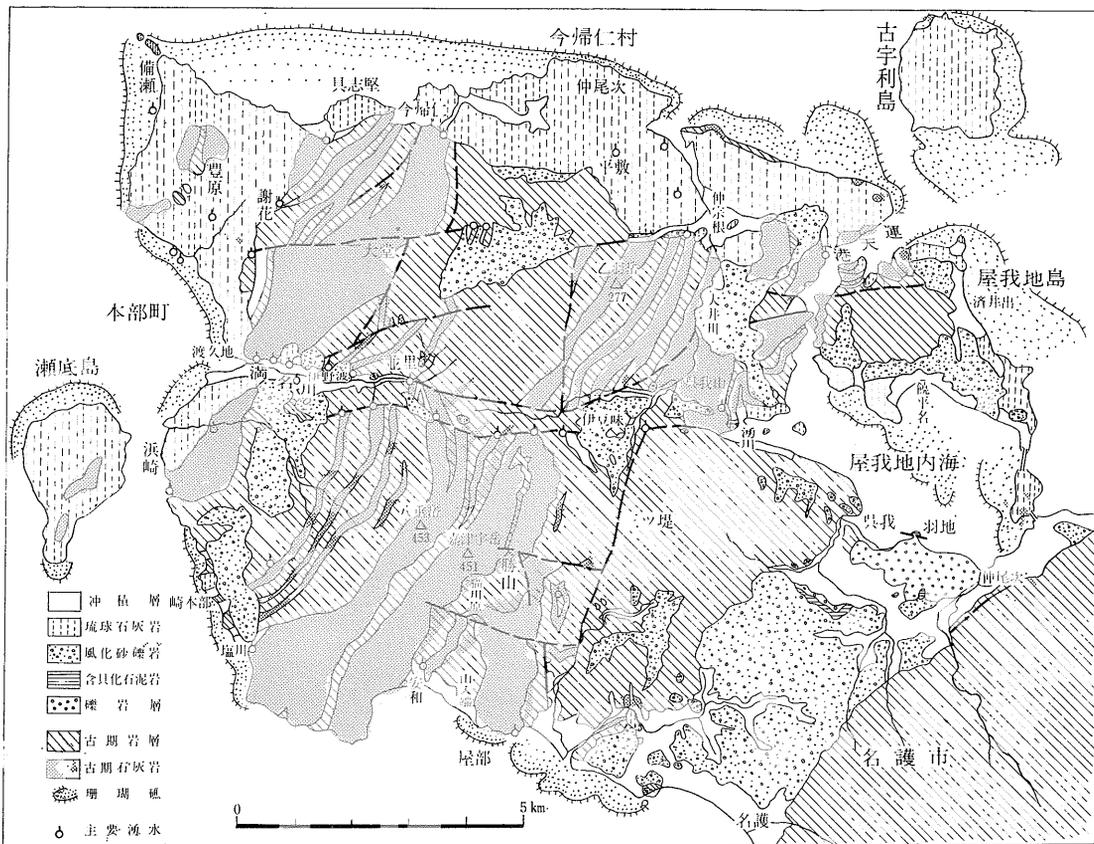
本部町や今帰仁村の山の中には 一見水の掛け口の無い窪地が多い。 大きいものは径数100mから1kmに及ぶものまでである。 それでいてこの窪地には湖水や溜り水がなく 窪地の中に集落が発達していることさえある。 またジーボン蟬の鳴くジャングルをかき分けて谷を遡ると その谷に水が全くない場面に屢々出会う。 そして一方では山麓や海岸線に沿って多数の湧水があり その数は50ヵ所以上 湧出量は日量数万 m³ を算している。 これは本部半島の山岳地帯を作る石灰岩のせいである。 石灰岩は雨水を大部分吸い込み 岩体内に水を貯留させながら地表に溢流させている。



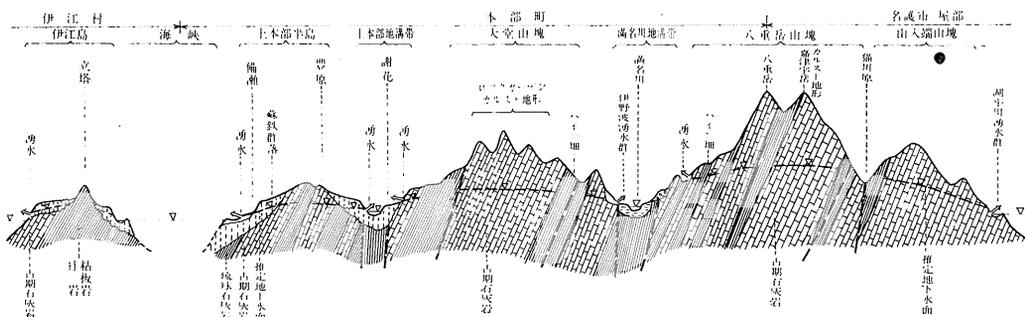
本部町の湧水群を代表する並里湧水 住民の生活用水として利用した残りは 写真のように溢れ 周囲の湧水群と合して満名川の清流として遊水地に注ぐ。 湧水群からの溢流が繰え 満名川が汚濁の摩水河川と



汚れを知らぬ琉球石灰岩の海岸 古宇利島にて



第5図 本部半島地質概要図

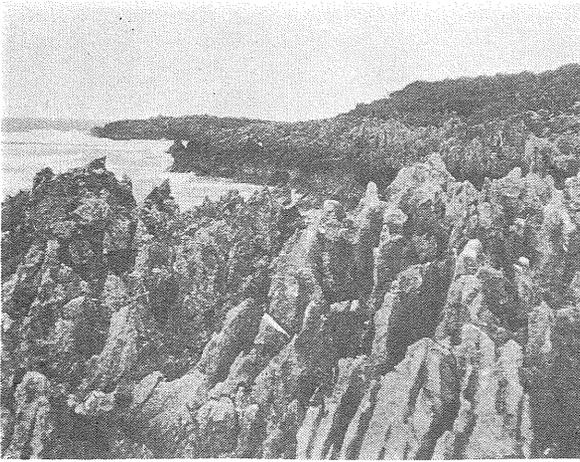


第6図 本部半島の水理地質断面模式図

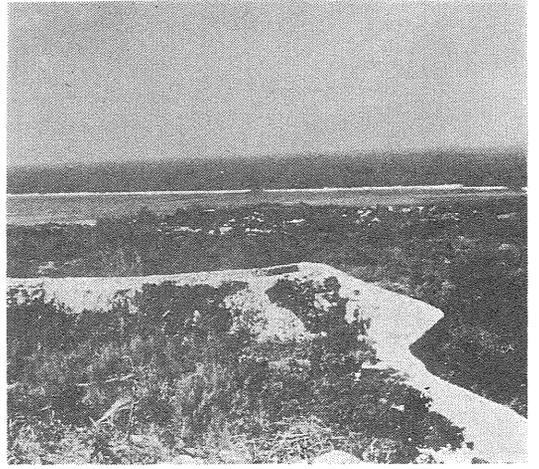
本部半島の湧水の大部分は古い石灰岩に由来し 一部は海岸近くの琉球石灰岩による。厚さ数10mの琉球石灰岩が水平的に横わっているのに対して 古い石灰岩は数100mの高い山地を構成するとともに 平均40~60°の傾斜で地下深く潜っており しかも厚さは数100m~1km以上に達するものまでであるから 地下水を包蔵する可能性のある体積は大きい。残念ながらその地下水のあり方は未詳の点が多いが 地下に分布する石灰岩の構造が解明されたとき はじめて地下水の賦存状態が把握

られることになる。満名川沿岸の湧水群はその溢流によって 満名川を養い 海に注ぐ清らかな水は 本部の海の生命に常に新しい活力を与えている。満名川の水が涸れ 汚濁の廃水河川となるとき それは本部の海の死滅の時であるかも知れない。

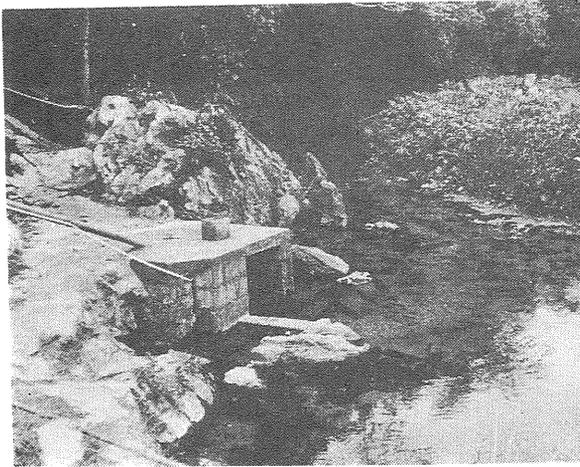
古い石灰岩は侵蝕によって特有の地形や奇岩を生ずる。先程述べた窪地の周囲の山頂はピラミッド型の尖頭頂を形作り 山頂と窪地と谷の間の斜面はカーレンフェルドの岩山を呈している。それは秋吉台のようにまとまっ



古生層石灰岩の海岸特有の侵蝕形 古宇利島にて



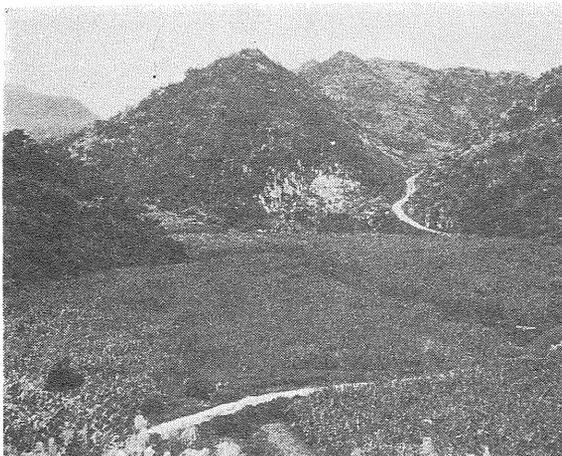
今帰仁城址から今帰仁海岸のリーフパリアーを望む



今 帰 仁 村 の 湧 水



今帰仁村の松並木 昔は往還至るところにあったと伝えられるが
現今では今帰仁村によく保存されている



古期石灰岩地帯の窪地（ポリエ） 地形的には完全に閉塞されているがど
んなに雨が降っても水が溜ることはない 周囲の白い岩肌と灌木とはさ
ながらロックガーデンを形作っている



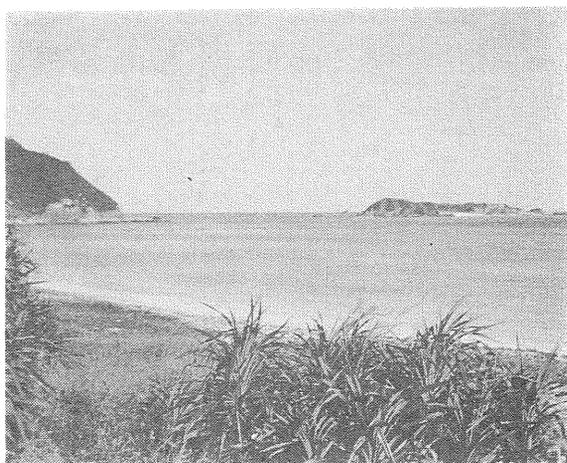
瀬底島の珊瑚礁海岸 対岸の山は八重岳山塊

た広さはないが 単なる草地ではなく適当に灌木が茂っているのでロックガーデンとしてみごとな景観を作り出している。本部半島の岩と水は 本部町と今帰仁村を中心とする一大庭園の立役者である。

7. 明日の沖縄のために

これまで見てきたように 沖縄の自然は天与の妙なる秩序によって それ自体世界に誇るべきさまざまの特色と美しさを維持してきたばかりでなく 住民の生活や独自の文化をも支えてきた。戦火の傷は自然系の中にも決して消えてはいないが 残された自然環境は未だ豊かである。それは永遠に子孫に伝える遺産でもある。しかしそれは 厳しい波風に堪え抜いて来た逞しさを備えている反面 開発という名の破壊力に対してきわめて繊細で弱々しい側面も持っている。汚濁の水が直接・間接的に珊瑚をはじめとする海中生物の生存をおびやかす危険性は 常につつきまどっているといわねばならない。岩にまつわる亜熱帯樹林は 一度破壊されるとその復元は容易ではない。軍事的基地群に加えて 若し産業開発という名の また観光開発という名の外来基地群によって全島が覆われるならば それが沖縄の自然と環境と固有文化の喪失をもたらすことは 本州太平洋ベルト地帯の 自然なき観光地 環境なき生活空間 個性なき都会文明への帰属の前例によっても明らかである。

地域開発は人間尊重の心を心とする理念と 自然の秩序を秩序とする科学のフィードバックによって始動され



清浄そのものの国頭地方東海岸 国頭村安田海岸

なければならない。人間尊重の理念と自然に学ぶ科学を無視した開発は破壊以外何者でもない。若しかつての本土で行なわれた従来の開発方式がそのままあるいは開発途上国に対するような感覚で行なわれるならば この小さな島の自然と文化の破壊は 10年を出でずして現われて来るかも知れない。それは沖縄にとって祖国の喪失を意味する。公害戦争という名の沖縄戦が再び起こらないよう そして残された祖国と自然が石灰岩の断崖に再び追いつめられることのないように折らずにはいられない。願わくば 摩文仁の残照や名護湾の夕映えが沖縄の明日の生命を永久に約束してくれることを。

(筆者は 応用地質部)



名護湾の夕映え 残波岬の彼方 東支那海への落日に折るは明日の沖縄に輝かしい朝があることを